

# 学術・思想史の視点より見た近代中日関係史における幾つかの問題点\*

劉岳兵

学術・思想史の視点より近代中日関係史における幾つかの問題点を検討する前に、まず、所謂関係史の要素を考えてみたいと思います。両国或は多国間の関係史という研究分野は、大変幅広くて、政治、経済、社会、文化などの分野において、国と国の間に何らかのかかわりを持たば、つまり何らかの関係があれば、すべての現象を研究の対象にできると思いますが、しかし、どんな複雑な関係にしても、具体的に分析して見れば、その要素は、お互いの認識、交流、そして影響という三つのものにほかなりません。お互いの認識は、ある意味で関係づける前提ですから、関係史には非常に大切なことでしょう。もちろん、お互いの認識は固定なものではなく、交流の広さと深さ、或は、どんな影響に与えたかによって変わっていきます。そして新しいお互いの認識に基づいて、異なる形で交流し、思わぬ影響を遺すかもしれません。それは、まさに関係史を研究する魅力の所在ではないかと思います。近代化の進展によって相互認識のルートが多様化してきたことは、言うまでもないのですが、日本の中国研究者と中国の日本研究者は、両国の相互認識に直接役に立てるものとして、中日関係史にとってやはり責任重大でしょう。

そこで、2006年1月に岩波書店より出版された『近代日中関係史年表(1799-1949)』(同年表編集委員会編集)から話を始めたいと思います。

## 一、『近代日中関係史年表』の見落とししたもの

この年表の「まえがき」には、近代日中関係史の全体像についてこう語られています。「対立を主流とする近代の日中関係であったが、同時に、そこに2000年にわたる交流が生んだ共通の文化を背景に相互依存の関係も存在した。」その編集方針については、「日中関係史の年表は決して多くはない。ま

た、それらはいずれも政治・外交関係を主としている。しかしながら、政治的関係に加えて、経済・社会・文化など様々な側面における関係、ひいては敵対する国家間の枠内では捉えきれない人的関係なども含め、両国の各領域の歴史的事実を日中関係史のなかに位置づけると、また新たな歴史の姿や意味が見えてくるのではないか。そして、上述したような対立と相互依存の関係を反映させることもできるのではないだろうか。このように考えて、私たちは本年表を作成するにいたったものである。」と述べています。付録「典拠文献一覧」には、日本と中国との両国の著作文献を合わせて千種類弱があげられています。今までのこの分野における研究成果の集大成的な作業と言っても過言ではないと思います。しかし、学術・思想史の視点より見れば、特に「社会・文化」の欄は、大変に開拓的な作業でありながら、見落とされた重要な歴史的事実も、また、たくさんあります。

ここでは、これらの見落とされた重要な歴史的事実の中から幾つかの例を挙げて検討したいと思います。短い時間では、「近代日中関係史の全体像」を見直すことは無理であることはいうまでもありませんが、少なくとも下記のような事実を通して、近代中日関係史の幾つかの側面が明らかになるものと信じます。近年中日両国の関係が所謂「憂うべき状態」にある中で「相互理解を深め、相違を認めつつ対立から協調の併立関係を築くこと」（同前）に貢献する為には、急いで不備の「歴史的事実を日中関係史のなかに位置づける」より、まず、もっと全面的に歴史的事実を掘り出して、それらの事実直面しお互いに検討しあつたほうが「確かな認識」をもたらすとすれば、本稿の試みもそれなりに役に立つことでしょう。

この『近代日中関係史年表』という本には立派な帯が付いていて、それには堂々と「150年におよぶ日中交流史の全貌を浮彫りにする」と宣言されています。（交流史は関係史の一部でしかないことを注意していただきたい。）本屋が商売のための飾り物として謳い文句を作るのはしょうがないことかもしれませんが、歴史を研究対象とするものは、やはりこのように自慢するより、むしろ謙虚な態度が必要であると思います。

## 二、『殷鑑論』と『鄰草』——思想史より近代中日関係史の原点を探る

この年表の「まえがき」に「日本は中国の状況を他山の石として西欧的近代に対応し、中国への帝國主義的侵略にも加担した。」ということは、おおざっぱに言いますと間違いないと思いますが、これについて、二つの例を挙げて近代中日関係史の原点となる「他山の石」というべき意識を具体的に探ってみたいと思います。

### 例一、古賀侗庵の『殷鑑論』（1813年）

1882年10月、古賀侗庵（1788–1847）の『殷鑑論』（竹中邦香編「天香楼叢書」第四冊，東京）が出版されました。侗庵の父は寛政三博士の一人古賀精里（1750–1817）で、侗庵の長男茶溪（1816–1884。名は増、謹一郎と称する）が家学を継ぎました。幕末には代表的な儒者の家でした。『殷鑑論』は『侗庵初集』巻九に収録、文化10年＝1813年の著作と推定されます（真壁仁『徳川後期の学問と政治』、名古屋大学出版会、2007年2月、228、637頁）。

◆『殷鑑論』の序（侗庵）：「唐人之書伝于我者，不止五車三万軸。書中所載，嘉言懿行、善政美事不爲少。舍其短而取其強、嘉其善而察其惡，不拘成迹、不牽陳言，此真善學者也。況聖人禮從宜、使從俗，生於斯邦、行斯政，必應因俗設教、損益古訓，以成一代之盛治，豈汲汲乎效彼哉。予有見於此，作殷鑑論十篇，以諗（深く諫める。『説文解字』：「諗、深諫也。」——引用者）學者。予性骯髒，言每過於激，此論近於裂眚罵詈，蓋性習之失，不能自掩，覽者諒焉可也。方今文教清明，自稱為夷、目彼為中華中国之非，人或辨之是也。然此尚其末者耳，故予舍旃，而独于政化民風尤致意焉。顧此論專論學者，故惟論唐人之失，而未及本邦。本邦仁政禮俗，即度越齊州萬萬，其損益因革之宜，亦多可言者，將俟異日而論之。殷鑒不遠之語，詩取時代近者（『詩經・大雅・蕩篇』：「殷鑒不遠、在夏後之世」。夏の滅亡は殷にとって前車の轍であること。——引用者），以為炯戒。予則借以指本邦與齊州地不相遠云。」

内容をみると、以下の文章があります。

◆ “世之儒先，自幼迄老，沈酣唐人之書，阿其所好而不覺其弊。”

- ◆ “唐人之不義无道，可惡可畏，万万不及本邦君臣上下仁而有礼也。”
- ◆ “唐人拘于末節而不明天下之体。”
- ◆ “唐人有華而无実，飾外而不修内，多虚喝夸誕之意，而乏忠厚敦篤之心。”

出版者竹中邦香は、その「跋」に、新しい時代になぜこの『殷鑒論』を刊行することにしたかについて、こう語っています。「支那國勢不振者，原於尊大自處，非使其自知其非，則言不可入，交不可久。今日之形勢，非我與支那爲唇齒，則不能興國益，宜規切之以示善鄰之宜。乃設善鄰義會，立五規則，將刻此篇，以頌同好。」

古賀茶溪の序（1879年6月）にも、「……我邦儒先依然守唐山旧説，不知所取舍，并其敝風陋俗，亦尊崇過当，貽害弗少。先人當日深爲國家憂，終草本論，將大聲疾呼，醒世間人之大迷，故其言時似涉過激，救世之念，勢不得不出此。在讀者自知耳。然世之好尚逐年變遷，國之敝害隨時不同。今日世人之輕侮唐山事，殆與昔日爲反體之觀。白面小生妄取聖經賢傳詬罵，絶無所忌憚。使先人見之，其所憂或甚於當日者乎，論之必有激于本論者乎，誠未可知。而今則已矣，是獨可惜也。」と書かれています。この時代の中国観、漢学観から見れば（中村敬宇「支那不可侮論」、『明六雜誌』第35号、1875年5月。同じく「漢学不可廢論」、東京学士会院、1887年5月8日、など参照）、こういう言論は珍しくないと思います。

興味深いのは、この『殷鑑論』はもともと当時の日本人が「自称为夷、目彼為中華中国之非」ということを弁するだけでなく、徹底的に「唐人」の「政教民風」を非難する為に書かれたのですが、時代が変わりまして、約70年後、この本をあらためて世に問うたのは、反って中国を輕侮することを防ぐ為でありました。茶溪の所謂「今日世人之輕侮唐山事，殆與昔日爲反體之觀。」であります。しかし、最終の目的は、もちろん日本の「国益」のためであることは、時代がどんなに変わっても同じでした。

## 例二、加藤弘之の『鄰草』（1861年）

加藤弘之の『鄰草』は「実に我が国に於いて立憲政体を説いた最初の著書

であって、最も貴重なる此の種文献である。」(下出隼吉『『鄰草』解題』、『明治文化全集』第八卷・政治篇、日本評論社、1992年復刻版、3頁)というのは学界の定評でもありました。実は『鄰草』の初稿本のテーマは『最新論』でありました。「鄰草」と名を付けたのは、蕃書調所の同僚であった西周、津田真道の意見によったものです。西周は初稿本に「朱書」で「魚人云、題名全く本論に適せざるに似たり。殷鑑新話ともか。又余り暴露に過ぎば、鄰も草などにては如何……」(日本近代思想大系9『憲法構想』、岩波書店、1989年、3頁)と書いています。

加藤弘之はこの本について自らこう語っています。「その第一の著述と云ふものは、「鄰草」と名を付けた書である。……私が二十六歳の時に書いた、何を書いたかと言ふに、即ち立憲政体、西洋には立憲政体と言ふものがあつて、一国の君だとか、大臣だとか言ふものが権を専らにすることをしないで、上院下院と言ふ、即ち議会があつて、而して国の法律財政等を議定すると言ふ制度が西洋に在る。……実は日本もそう云ふ様な塩梅にしたいことであると云ふ意味であつたけれども、日本の事を明らさまに書く事は出来ない、日本が悪いから西洋に倣うて、其制度を採つて政治を善くしやうと云ふ事を書く訳に行かぬから、そこで支那は昔は善い国であつたが、今は善くない、政治が公平でない、左ういふ訳であるゆえ、支那は衰へて仕舞ふから、西洋に模倣して立憲政体にせねばならぬと云ふ事にして書いたのである。即ち隣の事を書いたのであると云ふので「鄰草」と名を付けたのであるが、意味は日本を改革する事であつたのである。……立憲政体の事を日本で書いたは是れが一番初めてである。其以前に左ういふ事を書いた人は一人も無かつたのである。」(『太陽』臨時増刊「明治十二傑」、1899年6月、66頁。下出隼吉『『鄰草』解題』による。)

『鄰草』の最後には、このように意見をまとめてあります。「是故に、清主北京に還りて直に上下分権の政体を立て公会を設け、以て公明正大の政治を施すときは下民皆其仁徳に懐き朝廷を視ること父母の如く、万民相親むこと兄弟の如くにして、人和全く齊はんこと疑ふべからず、是時に至れば……縦

ひ外患内賊ありと雖ども決して患るに足らずして国家永く泰平、王室永く安全ならんこと決して疑ふべきなし。否らざれば縦ひ千万の砲銃船艦を造り昼夜の別ちなく操練教閲をなしたりとも、所謂佛を作りて精神を入れざる者に異ならざるべし。」(『鄰草』、『明治文化全集』第八卷・政治篇所収、日本評論社、1992年復刻版、14頁。)

上述の年表には「加藤弘之『立憲政体略』刊」(1868年)の項目を立ててありますが、残念ながら、近代中日関係史にとって、もっと重要な『鄰草』を見落としてしまいました。『殷鑑論』の姿も勿論見えません。ここで『殷鑑論』と「殷鑑新話とも」言える『鄰草』とのなかみを検討する余裕はありませんが、それは、確かに「日本は中国の状況を他山の石として西歐的近代に対応して出来たものですが、この対応のしかたは、いかがでしょうか。ある意味では、立派であると思います。なぜなら、「深爲國家憂」(深く国家の為に憂う)ことですし、或は、「日本が悪いから西洋に倣うて、其制度を採って政治を善くしやうと云ふ事を書く訳に行かぬから、そこで支那は昔は善い国であったが、今は善くない、政治が公平でない、左ういふ訳であるゆえ、支那は衰へて仕舞ふから、西洋に模倣して立憲政体にせねばならぬと云ふ事にして書いたのである。」つまり「日本を改革する」ことを促すための苦心の作だからです。しかし、よく考えますと、日本の「国益」の為に、「中国の状況を他山の石として」中国の「政教民風」を根本的に罵倒したり、或は、この罵言を以て「善隣の宜しき」を示したり、又、隣の「今は善くない」中国の名義を借りて、西洋のいい制度を導入することが必要であることを論じたりするのは、もし中国側も、これらを他山の石として謙虚に受け取って、自分を反省する材料として使えばいいのではないのでしょうか。それはまた別にして、これらの材料を中日関係(認識・影響)史に如何に位置づけるべきかは問題です。

キーワードである「他山の石」の元来の意味を見てみましょう。「他山之石可以攻玉」(『詩経・小雅・鶴鳴』)、つまり「他山の石以て玉を攻むべし」、『広辞苑』の解釈によれば、「(よその山から出た粗悪な石でも、自分の宝石

を磨く役には立つという意から) 自分より劣っている人の言行も自分の知徳を磨く助けとすることができる」という意味です。この「他山の石」の意識を国際関係史に運用すれば、自国は「玉」、他国は「石」、或は、自国は「優位」に立ち、他国を「劣等」と見なすこととなります。中国と日本との両国がお互いに理性的かつ平等に「併立関係を築くことが出来るのか」は中日関係(認識・影響)史の原点にかかわる問題であると思います。

ちなみに、幕末嘉永の頃、「清の魏源の「聖武記」、汪文泰の「英吉利考」、楊南の「海録」、西洋人蔣友仁訳、何国宗、錢大昕潤色の「地球図説」等を取捨して纂輯復刻したものが『他山の石』と銘打って出版されたことがあります。(開国百年記念文化事業会編『鎖国時代日本人の海外知識——世界地理・西洋史に関する文献解題』、乾元社、1953年、162～163頁。)

### 三、葉徳輝と塩谷温——学術史より近代中日関係史の多面性を探る

去年、私は『中国近代思想と日本——日本の学者の視点より』というテーマをめぐって関係資料を収集しました。このテーマを五つを分け、すなわち、康有為・梁啓超と日本、章炳麟と日本、王国維と日本、中国アナーキズム思想と日本、中国マルクス主義思想と日本、などの問題に関心を持ちました。確かに近代日本は同時代における中国思想に大きな影響を与えました。これは近代中日思想関係(交流・影響)史の主流といっても過言ではない歴史的事実です。この主流についての研究成果はたくさんあります。しかし、歴史は主流だけではない。いろんな側面があります。主流だけでは歴史の全貌を浮き彫りにし得ないでしょう。ここでは、学術史の分野で一つの例を挙げて近代中日関係史の多面性を検討したいと思います。

今、塩谷温(1878-1962)という名前は中国学の専門家以外には知られていないでしょう。塩谷温も幕末の名儒である塩谷宕陰(1809-1867)をはじめ、箕山、青山の学統を継いだ人です。明治35年(1901)東京帝国大学漢学科を卒業して、ドイツと中国に留学を命じられ、日本の中国学界における中国の文学、特に小説や元曲研究の開拓者の一人です。以下に挙げた史料は、1909

年から1912年まで、中国の湖南省長沙に師事していた葉徳輝（1864-1927）が塩谷温の博士論文（1920年）である『元曲研究』の為に書いた序文と、葉徳輝がなくなった後に塩谷温が書いた「追悼記」の一部分です。

葉徳輝「元曲研究序」（1923年）：

「塩谷節山君……十年前遊學來湘，與松崎柔甫同居，從餘問業。柔甫從治小學，君治元曲。二者皆至難之事。而以語言不通、風俗不同之故，雖口講指授，多方比喻，終覺情隔，不能深入。蓋以吳音不能移入湘人之口者，而欲以中原之音移於海外，豈非不可信之事哉。幸余家藏曲本甚多，出其重者以授君，君析疑問難，不憚勤求。每當雨雪載途，時時挾冊懷鉛來寓樓，檢校群籍。君之篤嗜經典過於及門諸人，知其成就之早，必出及門諸人之右。嘗以馬融謂門人“鄭生今去，吾道東矣”之語許君，君微哂不讓也。……歎君之博覽鴻通，實近來中東所罕見。書中推論元曲始末，及南北異同，莫不縷析條分、探原星宿。幸餘書未編定，若較君作，真將覆醬瓿矣。」

塩谷温の「追悼記」：

「先師一見旧の如く、開口直に学を論じ、談論風発の概あり。余傾倒する事甚しく、受業の志を決し、夏日酷暑……冬日嚴寒その秘笈を開き、底蘊を傾けて余に授けられたり。……余が短才を以て、南北曲に通ずるを得たるは、実に先師教導の賜なり。」（『斯文』第9編8号、1927年8月）

葉徳輝と塩谷温との師弟関係からみますと、日本近代学術史、特に近代日本中国学（或は「支那学」）を検討する時、西洋の影響は重要であることは言うまでもないのですが、中国の伝統学術の役割という視角も見落とせません。塩谷温の場合は、確かに葉徳輝に師事する前にドイツに2年間留学しました。それによって、西洋近代の学術理論と方法を身につけましたかも知れませんが、しかし、研究対象の中に本腰を入れなければ、どんなに巧妙な理論、或は方法を持っていても、無駄になるでしょう。

#### 四、『王道経論集』——近代中日関係史における思想的漢奸

『王道経論集』（1941年大東亜協会発行）の著者、池宗墨は、盧溝橋事件



(1937.7.7)の直後に発生した通州事件(1937.7.29)を解決した中心人物で、関東軍の指導下にある「冀東防共自治政府」の政務庁長官を務めたことがあり、漢奸として死刑に処された人です。この本の校訂・発行者である川崎紫山は、右翼のジャーナリストです。頭山満の「運用之妙在一心」、徳富蘇峰の「道義治国之要諦」、荒木貞夫の「王道蕩蕩」の書を挙げています。中国の漢奸の言論が日本の軍国主義者に利用された貴重な資料であると思います。そういうことを中日近代思想関係(交流・影響)史に如何に位置付けるべきかは無視することができない問題でしょう。

池宗墨という人物については、『王道経綸論集』の「例言」に詳しく紹介されています。「池宗墨君は浙江人、我が東京高等師範の出身である。帰国後、多年社会事業に従事したが、満州事変以来、東亜の局勢一変し、昭和10年11月25日、冀東防共自治政府の組織せらるるや、最初の政務長官殷汝耕氏の秘書長と為り、天下に率先して防共親日の第一声を揚げ、東亜建設の急先鋒と為り、大に其の手腕を発揮した。」盧溝橋事変後の通州事件に、池宗墨は「身を挺して難局を收拾し、民衆より推されて政務長官を署理し、8月8日、唐山に於いては防共自治政府の再建に著手し、翌13年2月、北京臨時政府に合流するに至るまで二年有半。其の苦心惨憺、鞠躬尽瘁の状、筆舌の能く尽す所ではない。」

川崎紫山はこの本の前に、55頁にわたる長文の「王道経綸論集に題す」を置きました。中国の歴史から世界の大勢まで、いろいろ書いてありますが、その旨趣は、つまり「苟も我が帝國にして、善く支那伝統の歴史と支那伝統の国民性を認識し、之に由って政治の指導に、経済の開発に、文化の創造に勉むるならば、支那四億の民心は水の卑きに就くが如く、草の風に靡くが如く、日本に帰すべきことは疑を容れない。民心一たび日本に帰せば、始めて以て治安を維持することを得べく、政治を改善することを得べく、経済を開発することを得べく、文化を創造することを得べく、東亜の新秩序は期せずして建設することを得べく、東亜永遠の平和は期せずして樹立することを得るであらう。是れ君(池宗墨——引用者)が王道主義に由って、日本と與に

支那再造の大業を完成せんことを期する所以である。」(49-50頁)最後にこう言っています。「池宗墨君の『王道経綸論集』は、固より同君の一家言に過ぎざるものであるが、しかも君が王道主義に基く日支提携論は、功利主義や、個人主義や、物質主義に偏したる日支提携論にあらず、又た孫文の提唱したる三民主義に基いた苟安的和平の日支提携論にあらず。所謂東亜民族を打って一丸と做し、道義的国家を建設して、東亜の平和を維持し進んで世界の人文と人類の福祉とに寄与することが最後の目的である。(改行)余が君の友人として、本書を和訳し、且つ刊行して江湖に頒つ所以のものは、東亜建設の為に君と其の志を一にし、又その憂を同うする一人であるからである。」(54-55頁)

川崎紫山はこの本の後に付録した「再び王道経綸論集の後に題す」という文章にも、改めてこう強調しています。「日独伊三国同盟なるものは、平和的使命を完うするを目的とするに外ならざれども、独伊の欧州新秩序と日本の東亜新秩序とを破壊せんとする敵性国家ありとせば、我等は進んで破邪顕正の剣を執らねばならぬ。彼等は東亜建設の敵であり、彼等は世界平和の敵であり、我が皇道経綸の道に反する敵であるからである。(改行)皇猷は六合を兼ね、八紘を掩ふにあり。我が帝國は世界政策に立脚して東亜問題を解決し、……大東亜共栄圏を樹立するは、皇道の要諦であり、王道の要諦である。而して池宗墨君の王道論も亦其の帰する所、亦之に外ならぬ。今後国際の情勢は如何に波瀾曲折を極むるも、如何に千変万化窮りなきも、天下に敵無きは皇道であり、王道である。皇道を行ひ、王道を行ふものは、天下に敵が無い。日独伊枢軸に由りて世界の東西の新秩序を建設し、進んで世界の平和と人類の福祉とに寄与するは、皇道であり、王道であらねばならぬ。」

「王道」という儒教の政治理想を、如何に「偽善化」したかという問題は、日本儒学史にとってはもちろん、近代中日関係史の分野においても真剣に検討しなければならないでしょう。ある意味では、この問題は、理論的分析より、むしろ歴史的状況に応じた実践的観点からのほうがその本質にアプローチしやすいのではないかと思います。

## 五、『中国民族自救運動之最後覚悟』——再び思想史より近代中日関係史の原点を探る

近代日本における軍国主義者は、中国の漢奸の言論だけを利用するのではなく、「愛国的」、「中国民族自救運動」に全力を挙げた思想家の著作をも悪用しました。梁漱溟はこの典型であると思います。実は、深く考えてみますと、梁漱溟を代表として提唱された中国の郷村建設運動に従事したものは、安岡正篤を中心とする日本の農本主義者との間に、思想的交流が確かにありました。中日両国にそれぞれ起ったこの二つの思潮の関係を理論的に研究することは、近代中日思想史における究明すべき一つの意味深い課題であろうと思います。

1940年、梁漱溟の『郷村建設理論』が日本語に翻訳された（池田篤紀訳、大東亜建設社）あと、翌年、その『中国民族自救運動之最後覚悟』も（池田篤紀訳、大東亜建設社、1941年）日本語に訳されました。『郷村建設理論』の翻訳を中心に、拙稿「梁漱溟的著作在日本的影響」（『中日近現代思想与儒学』に収録、北京：三聯書店、2007年）に論じましたので、ご参照いただければ幸いです。『中国民族自救運動之最後覚悟』の「訳者序」には、「梁漱溟氏の考は前に大東亜建設社から出た郷村建設理論で整理され一応体系付けられているのであるが、梁氏の考方に共鳴され或は興味を抱く人々に郷村建設理論の素材となっている諸論文を此処に纏めた。」と述べるほかに、『郷村建設理論』と「新民会」にも言及しています。日本語に翻訳する目的は、『郷村建設理論』と全く同じです。それは、その訳書に付属する最後の挿しページに、同じ著者の『郷村建設理論』の「安藤紀三郎中将閣下序文之一節」を添付したことによっても一目瞭然でしょう。曰く、「翻って観るに、中国の人口は、農民の約八、九割を占め、其の社会機構は、政治、経済、文化等あらゆる角度より見て、仍ち半封建的、半植民地的萎縮假眠の状態に在ることは否むべくもない。（改行）於是我が皇國と中国とが、直に提攜協力して、聖戦の名に相應しき歴史的發展の内容を合作賦與する為には、物心兩面に巢食ふ、あらゆる個人主義的、自由主義的乃至資本主義的、共產主義的汚濁を排除拂拭し、自家本然の姿に立ち帰って、亞細亞的新秩序建設の血と魂とを求

めねばならぬ、然らざれば、歴史的発展の必然性に背戻する計りでなく、防共、親善と云ふ當面消極の協同聯關性から見ても、斷じて建設の意義を生かして得ないであらう。」

## 結び

以上、おおざっぱに、最近、関心を持ちました近代中日関係史における幾つかの問題点をお話してきました。中国人は日本のことについて、だれでも一つ一つ筋道立てて話すことが出来そうですが、実はほとんど、口から出任せを言っているのです。こういうふうになったのは、二つの原因があると思います。一つは、中国文化は日本の文化の母体であるという自慢。もう一つは、日本のことを言うと、冷静な思考より感情が先行しやすいこと。この二つの無形の壁を破らないと、中国の日本学の進歩を望むことは、難しいでしょう。一方では、日本の中国学は、近代以来、京都支那学派をはじめ、大物がたくさんいました。しかし、日本の中国学者は、よく政府の政策に協力してきました。戦争時代という特別な時期は言うまでもなく、いまでも、その発言は学術的な装いを施されて、例えば靖国問題について政府に媚を売ることがない、とはいえないでしょう。上述の『近代日中関係史年表』の編集委員たちは、この分野での碩学であり、以上の歴史的事実を見落とされた原因が、認識上の不足か、或いは意識的に捨てられたかは、分かりませんが、いずれにしても、この分野では、もっと真剣に、もっと謙虚に、もっと客観的に、より多くの歴史的事実を掘り出して、勇気、そして良知を以て直面していかなければならないと思います。

最近では日本中国学会で「日本の中国学の地盤沈下」という危機感が蔓延しています。その時、日本の中国学者だけではなく、中国の日本学者も、中日関係史における最も重要な相互認識の問題を真剣に考えなければならないでしょう。

- \* 本稿は早稲田大学島善高教授のお招きに応じて2007年7月18日に早稲田大学社会科学部で講演した「学術・思想史の視点より見た近代中日関係史」、及び2007年10月19日に慶応義塾福澤研究センターで講演した「近代中日関係史における幾つかの問題点」のレジユメに基づいて加筆したものです。この講演の機会を与えていただきました早稲田大学島善高教授、慶応大学岩谷十郎教授・西澤直子準教授、及び大妻女子大学井田進也教授、またこの文章の日本語を訂正していただきました南開大学の外国専門家である井上亘博士に感謝いたします。内容に関連する拙著『中日近現代思想与儒学』（北京：三聯書店、2007年）の序言及び収録した論文「梁漱溟的著作在日本的影響」のほか、拙文「葉德輝的兩個日本弟子」（北京：『讀書』2007年5月号）をご参照いただければ幸いです。